



写真と文：足立 攝

大分県 現代俳句協会 会報

第130号

令和6年1月31日

現代俳句歳時記 【枯芒（カレススキ）】

枯尾花（かれおばな）とも。10月頃に花穂をいっぱいにつけた芒は穂架を風で飛ばし次第に立ち枯れてゆく。寒風になびく枯芒は、昔から日本人に儚さ、わびしさを感じさせてきた。

人ごゑを拒む高さに芒枯

山田 弘子

総会を成功させよう!

2月12日(休)10時半開会 大分ホルトホール

大分県現代俳句協会の第34

回定期総会を本年2月12日(月・休日)の10時半から、大分ホルトホールの302会議室で開催します。毎回、トキハ・県庁側にあるコンパルホールと勘違いする人がいますので、ご注意ください。

この総会は前年度の活動報告、本年度の事業内容の決定、および役員の変更がおもな任務です。恒例になった午後の懇親句会を含め、総会に出席することは、自分たちの協会を自分たちで創るという俳句運動の基本に参加することであり、俳句をより深く実感することにもなります。d貴重な時間を割いて参加する価値のある「総会」を創ろうと事務局では準備を進めています。昨年度はコロナ以降はじめて、有人でイベントを開催で

午後は参加者で懇親句会

きた記念すべき年になりました。60名が参加したアートプラザにおける「第33回大分県現代俳句大会」、60人を集めた「第20回県協会吟行俳句大会inこのえ」、26名の参加で開催した6年ぶりの「現代俳句勉強会」等々、いずれもコロナ禍の疲弊を感じさせない熱気のあるものになりました。

本年度はこれらの成果の上に協会の影響力を県の内外にさらに推し進める活動が求められます。総会には会員以外の方も出席できます。(発言はできませんが決議権はありません)お誘い合わせのうえ、ご参加ください。総会のあとは昼食を挟んで、懇親句会を開催します。事前に各自2句の投句が必要です。(本誌2P参照)投句せずに見学する方も歓迎します。

有料の地下駐車場があります。

令和五年度 第二回雑詠句会 結果発表

稲を刈るたびに小さくなる故郷

〈21点〉 足立 攝

引き算の余生抱えて秋深む

〈20点〉 甲斐加代子

村じゅうの夕日集めて稲を刈る

〈19点〉 足立 町子

〈15点〉

着崩れを闇にあずけて踊りけり

山口 雀昭

〈14点〉

秋天へ重いものから捨ててゆく

赤嶺 信子

ゆく秋の三歩先行く記憶力

甲斐加代子

鶴折りても折りても足りぬ八月よ

有永真理子

〈13点〉

食べごろを逃れしオクラ天を突く

赤峰佐代子

心配の種がぼろぼろ唐辛子

足立 町子

〈12点〉

でで虫や来世は翅をつけて飛べ

高橋 玲子

ふり返るための坂道葛の花

石橋紀公子

〈11点〉

柿熟し身の混沌を抜け出せず

吉田 素子

〈10点〉

ひまわりの鬱戦争が終らない

宮川三保子

もぎたてのトマト生真面目すぎるのよ

鎌倉真由美

満月の妖しき中へ老いてゆく

園田 武子

鯖寿司を買って上りの七号車

高倉 直人

〈9点〉

いつもより母がやさしい野分けの夜

足立 町子

無花果よ庭に小さきエデンあり

藤 万葉

太陽を閉じこめているトマトかな

安森 範明

寒さくろが空の青さへはみ出しぬ

石橋紀公子

独り居にいつしか友となる金魚

高橋 玲子

〈8点〉

千の風受けて枯野はさわぎだし

御手洗豊海

暗誦は一行だけの法師蟬

上田たかし

主婦という服を脱ぎ置く夏の果て

鎌倉真由美

夏厨強き女のふくらはぎ

菅 登貴子

春秋をちよつと置き去る喫茶店

赤嶺 広史

悔しさも生きる力や蟬の爪

高橋 玲子

田を守り村を護りて風薫る

福井トミ子

ひとことを言えないままに冬の蘆薈

本田 圭子

放棄地の芒は風に抗いて

井上 則子

〈7点〉

敬老日あたりまえと言う贅沢

佐藤 律子

山じゅうが燃えて命が連鎖する

坂本 一光

売れ残るいわしの翳にある汚水

上田たかし

冬近し薪を割る音透きとおる

立花真由美

長電話遠くで同じ月をみて

赤嶺 信子

定期総会後の懇親句会 作品募集

◆本誌一面で案内の懇親句会の作品を募集します。当季雑詠作品2句をハガキ、FAX、メール等でお送りください。
◆会員、会員外を問いませんが総会参加の人限定です。
◆締切は二月五日としていますが、二月十日まで受けつけます。事務局足立まで。

6年ぶりに現代俳句勉強会を開催

会場のコンパルホールに26名



平成29年(二〇一七年)以来休止されていた現代俳句勉強会が9月30日(土)大分コンパルホールで開催され、有村会長、足立幹事長ほか26名が参加しました。

勉強会は事前に投句と選句を済まし、当日はその集計を配り、高句から順次検討に入りました。勉強会は半数以上が新会員でしたが、みんなが発言し活発な討論になりました。新会員の質問には有村会長や牧野桂一氏などの実力者が丁寧に答えていました。

句会では、初心者も初心者でも分かる作品を選ぶこと。従って高得点の作品が必ずしも良い作品でないことや、イメージだけで選ぶと、自分が思っていたのと正反対の作品を選んでしまうことがあることなどが実例をあげて示されました。また、「原潜の影をあへと海月泛く」「秋晴と口に出したら鳥になる」「人間の顔の切れ味冷奴」などの句意についても質問が出て、作者以外の人が答えていました。文芸は発表されたときか

ら読者のものなので、作者の制作意図が答えとはならないことを学びました。参加者の作品は以下の通り。

片減りの墨のうすら香父の日よ

(立花真由美)

原潜の影をあをと海月泛く

(牧野 桂一)

朝顔やまだ軒先に母の顔

(赤嶺 広史)

秋晴と口に出したら鳥になる

(足立 攝)

傘立ての杖の出番や霜日和

(早澤まり子)

人間の顔の切れ味冷奴

(有村 王志)

短日の道に迷ひし交差点

(吉田 素子)

白扇やおよびのリズム三拍子

(内田トシ子)

秋海棠頭を垂れて誰を待つ

(藤沢 泉溪)

目隠しの小さき指や福笑い

(藤 万葉)

虫の音や苦も楽も無く一日終ゆ

(幸谷 恵子)

遠い日の母と月夜の下駄の音

(井上 則子)

逆上がりの少年が抱く鱗雲

(白土 正江)

三女です糸瓜のようなおんなです

(足立 町子)

かあさん幸せでしたか曼珠沙華

(天田 泉美)

方円の世に随わず柳絮飛ぶ

(田中 充)

襟足を短く揃え今日の秋

(石橋紀公子)

秋の羅漢寺われも仏の一人なり

(赤峯 友子)

霏霏Ⅱ 中山宙虫氏



当協会の中山宙虫氏が主宰誌である霏霏Ⅱの13号「冬号」を発行しました。今号も俳句作品、エッセー、評論など充実しています。

街に出る味方は秋の雨ばかり
椎の実を踏む音雨後の港まで
冬夕焼街に善意を貯める箱

(宙虫氏作・編集部抄出)

連載・俳句講座 〈第5回 選句・選評について〉

俳句をこころざす者にとつて、作句と選句は車の両輪です。ところが作句についてはこの「連載俳句講座」のほかにも、数々の入門書や研究書が出回っていますが、「選句の仕方」に言及したものはほとんど見当たりません。「俳句が上手くなれば、自然と選句も上手くなる」という都市伝説が大手を振っていて、真面目な会員は何を手がかりに選句したらいいのかを真剣に悩んでいます。そこで今回は「選句選評について」をテーマにしました。（この連載は協会員なら誰でも執筆できます）

選句・選評は積み重ね。日頃の修練こそ

有村 王志

結論から言えば、選句・選評のこの両方に対しての特効薬は存在しないと思います。敢えて言えば、自分の好み。好きな俳句を選び、選評は、その理由を書くということになります。

勿論、俳句が集積の文学と言われるように、初心者から、ベテランと言えらる人達のそれぞれの修練の結果の「選句・選評」にはなります。それぞれが腐心して作品を作り、選句をし、人の選評を読むなどを積み重ねていくことにつきます。

このことは記述するというより当たり前のことだと思つていきます。協

会としては、先の勉強会の提供などは大変効果があると思います。また、同じ作品をベテラン・中堅・初心者などに分けて二百字程度の選評をもらうという場づくりの提

「選句」について思うこと

伊藤 利恵

「AI一茶くん」はまだ選句が得意でないらしい。一茶くんを選句をさせるには秀句とそうでないものを区別する基準を数値化して与える必要がある（らしい）が、これがなかなか難しい（らしい）。そうだろうな

供は、効果があると思います。こういう解釈もあるのかといった多様な選評による相乗効果が期待できます。

その場合の例となる作品は、現代俳句全国大会の大会賞等々、選句は沢山あると思います。この企画を事務局にお願いしておきます。

あとと思う。私の場合も俳句を作るより選ぶ方について努力が要る。秀句とそうでないものの区別など実のところ私にはよく解っていないのかもしれない。秀句の条件として「季語が生きているか、写生はできてい

るか、実感があるか」等を挙げる人も多く、初学の人にはこれはこれで解り易いかもしれないが、写生や実感ということに重きを置き過ぎると「詩」の生まれる隙間がなくなり累々と類句を産み千年変わらぬ選をし続ける事にもなりかねないようなそんな恨みも残りそう。私は一応これまで類句・類想は採らないことと、作者の発見はあるかという点に注目して選をしてきたつもりではあるが、これとてかなりいい加減で類句にしても独自性にしてもただ私が知らなかっただけかもしれないし、加えて、例えば浅学の悲しさで古事が背景にある句を読み切れなかったり等々、あまり胸を張れる選をしてこなかったように思う。

それでもさかしらに「季語が動きますね」「作者が見えません」と言い散らかしてきた自分が今つくづくと恥ずかしい。そのような過去の反省もあってか、このごろの私の選句をつらつら分析してみるとなんだか自分の「好きな句」ばかり採っている気がする。「よくできているけれど好きではない句」はそつと選から外すようなそんな傾向にあるようだ。もしかしたら加齢が原因かもしれないが。

しかしながら「好き」という判断基準に全く自信が無いわけでもない。好き嫌い、私という人間が持つ情報の集積の上に成り立つ判断基準ではなからうかとも思う。七十年の間に五感で受け取った様々な情報だけでなく、母や祖母やはるか家系を遡る情報も少なからずあるだろう。もし数値化できればたぶん膨大な量に及びそうだ。AI一茶くんも更に大量の情報が与えられ、いずれ選句ができるようになるだろうが、けれど、私達俳句人（はいくびと）ひとりひとりの体の中にある情報の量もたぶんそれに引けを取らないだろう。そして「好き」は、その情報が個々それぞれに於いて混ざり合い攪拌され濾過され抽出されたかなり純度の高い判断基準ではなからうかと、私は思うのである。

歳をとるといろいろなことが億劫になるけれど、選句に於いて私が一つだけ自分に課しているのは「よくわからないけれど好きな句」は必ず採ること。

そして選評を書いてみることに。試行錯誤しながら評を書いて行くうちに句の意味が解ったり、その句の持つ感覚に近い思いが兆すこともある。たぶん誰も、自分を超える句は詠

めないけれど、採ることはできるのではなからうか。そして、「好き」に自信を持ち真摯に句に向き合うと、選んだ句がその人の俳句世界を広げてくれるそんな僥倖にもたまに巡り会えるのではなからうかとも思う。私の加齢は加速するが草稿用紙を開く時のときめきは常に鮮しく、選

選句は好き嫌いで楽しむ

「選は創作なり」これは言わずと知れた虚子の名言、と言うより広く知られた言葉だ。

選句をも軽んじてはならぬ、という警告に重点があるのかも。今回、「連載俳句講座」シリーズとして、事務局より表題について述べよ、との要請があり少々戸惑った。事務局長の書面にある様に「数々の入門書に、選句の仕方、に言及したものは殆ど皆無の状態です。」

選句の仕方に、偶然わたしと同じ事をしている高名な仲 寒蟬がいて同感した。第二十四回現代俳句協会年度作品賞受賞者経緯報告の文中にあった。応募作品各人三十句、一八六編の応募作品の選句・選評で大変な仕事量であつたらう。寒蟬氏の選考要

句は常に難しく、選評を述べあう間は三十年変わらずエキサイティングである。

選句とは作品の優劣をつけることではなく、鮮しい自分に出会う扉を自分で見つけるためにあるようにこのごろは感じている。

河野 輝暉

旨を引用する。

——「目覚めさす」では表題に不満があつたが○を付けた句が十二句と最多であつた。「転居」も○が十一句と遜色のない評価だった。

他の人の作品には○以外に×を付けた。とあつた。小生の選句法は○×に加え△を使用する事によつて遺漏を防ぐ様にしていく。スポーツの試合ではないが、対象全句を予選し粗選（あらより）をする。第一印象が案外当っていることが、入選結果の発表で判明する。その上で、何句選なのかの規定数を、準決勝として、気に入らない×を、そして△の句を目印に削つてゆき、規定選句数を決定する。次に大切なことは、済んだ選句をすぐに発表したり、提出先に

投函しないことである。そのためには、選句等に慌てないよう早くから取りかかると。理由は、選句・選評の結果を「しばらく寝かしておく」つまり熟成期間を設けることである。このことは俳句を提出する場合はより一層大切である。

自分の選んだ自作品、また他人の作品の選句でも、三、四日も経過するうちに、しまった、あの句よりこの句の方が良かったのに、と後悔した経験のある人は多いのでは。

やや難かしくなるかも知れないが、選句の悪しき照準を並べると、類句、説明、報告、陳腐、通俗、観念的、スローガンなどがある。

一般受けすることばに、俳句も芸術なら個性的であり脱俗風流なのが良い、がある。

これも一つの真理であるが、俳句は詩や小説の様にただ一人で成立する文芸ではない。作者はもとより、加えて鑑賞者に責任の半分が負われ、二者が平等民主で作る。世界で類例を見ない日本独特の文学作法だ。

即ち選句によつて一句の価値が左右されるのである。この句は難解で駄目と評価を誤まらないためには具現俳協の会報句報に多く触れ、目を肥やす必要がある。気障に言えば教養

がなくては正しい選句・評価はおぼつかない。勉強をしないで、一句の難易、不出来は専ら作者のせいにしてはならない。例をあげよう。

夏草やつはものどもが夢の跡(芭蕉)

俳聖芭蕉のわりに分かり易くて物足りない、と思わないこと。

この句は源義経をかばった東北の藤原三代の栄枯一睡の夢がある。

「奥の細道」冒頭の「月日は百代の過客にして往きかふ年もまた旅人なり」という流転の姿に詩情が喚起されている、という背景。更に表現手法としては、芭蕉が尊崇してやまなかつた中国唐時代の詩人、杜甫の「春望」をいう漢詩「国破れて山河在り、城春にして草木深し」が背景に敷かれている。

よく眠る夢の枯野が青むまで(兜太)

この有名な句も、「よく眠る」は芭蕉の辞世の句(病中吟)に発しており「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる(芭蕉)」を踏まえている。芭蕉は死出の旅を夢想しているのに対して、兜太はよく眠って青野の芽吹きと俳句で競演するのだ、と明日を向く。

以上の二例の様に、その句のバツ

クグラウンドを知っているか否かによって初めて一句の価値が上下する。俳句は奥が深いとは、背景を省略して凝縮しているからだ。

選句の難易や選句力について、作句力を超えた選句力は無い、とは一般論では言えよう。でも、バイオリンを弾けない者でもベートーベンの音楽に心酔できない事はなからう。

少しでも気になる句を大切に

中山 宙虫

選句は、確かに難しい。句会や俳句大会など選者としての立場が違つてとまどうことが多い。互選の句会もあれば、特定選者での選句もある。しかし、経験豊富な先人たちの選も多くの初心者たちの選も基本は同じ。自分が好きな句である。経験を踏まえてくるとその内容や作風や形式などに目が行くようになってくる。間違ひなく選句の目は育っていく。選句をする際の自分なりのポイントをあげてみたい。

「好きな句」そして「気になる句」にも注目する

句会や俳句大会では様々な句が登場する。すんなり読める句から難解

作句は下手でも秀句に感心できない事はなからう。角川俳句誌の座談会に次の発言を見た——他の句会に初心者句会を特設しているが、最初からいい句に会わないと何時迄たつても上達しない——というもの。自分の背丈で気に入った選句をし、その自己評価は入賞作品と比較検討してみるくらいで十分と思う。祈御精進。

な句まで。選者として、自分の理解できる句がやはり選を入れるかどうかの最低の基準だろう。が、少しでも気になる句があれば注目をし、再度読み直し、何が気になるのかを考える。何か発見できれば、選に入れることができるかもしれない。こうやって、選句の目は広がっていくことを実感したい。

以前に見た句と似たような句は再吟味する

自分の選句の傾向はもろろある。それを否定することは必要ないが、選を進めていくと、いつも同じようなフレーズや取り合わせの句やどこかで見たことがある内容の句に選を

入れていることに気がつく。

例えば

「Tシャツがパリッと乾く」

「彼岸花が飛び火」——など。

これらの句に過去に選に入れたことはないだろうか。過去の作品の上を行くほど心をとらえる句かどうか検討することが大切。この検討が選句には必要だ。

たとえ、好きな句でも類想類句と思われれば、一旦選を保留する勇気を持ちたい。「過去に見たことがある」このひと言は重要だ。

選句は比較の作業であることを常に意識する

句会や俳句大会の選句は、投句された句を比較する作業だということを意識しておきたい。小さな句会から大規模な俳句大会まで、俳句を続けていると、選者として俳句に接しなければならぬ。当然、自分たちの小さな句会で見ても、特選にした句が再登場したり、前に選にも入れなかった句に選を入れることもあるだろう。が、その句会や俳句大会に投句された句群の中での比較の結果である。また、俳句の選は、その時点の社会情勢や選者自身の心境にも大きく影響される。大胆に言えば「好

きな句」が日々違うのである。「良
い俳句」「正しい俳句」という評価
は、こういった経験の積み重ねから
自分のなかで培われるもの。おおよ
かな気持ちで選に臨んでほしい。

特選とした句は

自信を持って評価する

特選を設けている句会などもある。
他の選者が、誰も特選に選んでいな
い句を特選にすることが多々ある。
各俳句大会などで有名選者たちの特
選も実はばらばらで、ひとつの句に
特選が集中することはごく稀。高点

私の選句方法として投句数が多い
時も少ない時も三回は熟読していま
す。一回目は初めから読んで二回目
は後ろの方から、三回目はまた初め
に戻りチェックをしていきます。

最後に自身が感動して心の琴線に
触れた作品、印象に残った作品を選
んでいます。

また、五・七・五の定型俳句が常で
すが自由律俳句もあるので季語の有
無、字余り、字足らずの作品をも注

の句に実は特選がほとんど入ってい
ないのも実情。そこに気づくと、自
分の特選とする選はまちがっていない
という自信を持っていい。特選句
の良いところをきちんと評価するこ
とが大切。選ばれた作者は、きつと
その評価で次に向かうステップにす
るはずだ。小さな句会の小さな特選
かもしれないが、俳句作家を育てる
後押しをする。そして逆に自分の作
品作りに跳ね返るものだと理解した
い。自分にとつても、選をすること
で自分の俳句世界を広げていくチャ
ンスである。

選句・選評は積み重ね。日頃の修練こそ

宮川三保子

意深く見ます。その辺も良いと思っ
た作品であれば気にしません。

選評についても、同様に熟読しま

作句と選句は独立した文芸

俳句がうまい人は選句・選評も上
手という俗論があるが、それは誤り
である。もちろん両者に相関関係は

あるが、俳句の勉強をすれば選句、
選評が自動的に上手くなるわけでは

余白のパズルⅡ選句・選評に当たって

河野 則子

俳句は世界最短の文学形式だと言
われています。それ故に選句に当つ
ては、余白にこめられている作者の
体験や立地位置をまるでパズルを解
く様にさぐらねばならないところが
あると言えましょう。

例えば十句を選ぶ条件の場合を例
にとると、先ず十五句程度の大まか
な佳句に○印を付ける。次に○印の
句の中から、選評を書くにふさわし
い心に止まった句を◎にし一句の評
を考えます。

自分が行った選句の妥当性は、他
の多くの人が私が選んだ同じ句を選
んだ結果、入賞したり高得点を取っ
ていることでわかります。逆の場合
は自分の選句力がどうであるかの、
目やすになります。

「選句力は創作力」でもあります。
俳句を作る力量を高めることが選句
に当たってもいかに大切なことが分
かると思います。選評を書く事は自
分の作句の勉強にもなっています。

す。読み手の見解の相違もあること
でしょうが、作者の意図とすること
ろをくみとります。そして自分の気
持ちに置き換えてみます。

足立 撮

ない。別の文学領域としっかり意識
してそれぞれに訓練していくことが
必要である。

こんなことは、他の芸術形式では
当たり前のことで、著名な芸術家の

まわりには常に優秀な批評家がい
た。批評も芸術の一ジャンルとして世界
では定着している。

しかし日本では、批評家に対して
「他人のふんどしで相撲を取る厚か
ましい人」というような間違った認
識が蔓延しているため、批評家が生
まれにくい素地ができています。ま
して閉ざされた最果ての俳句ムラであ
る。批評というジャンルが育たなかつ
たのは当然と言えよう。山本健吉、
川名大、仁平勝のように、専門的論
評を加える批評家がいなかったわけ
ではないが、俳句評の主流は俳人の

片手間仕事のまま、今日を迎えている。俳句の世界にも、しつかりした歴史観や文化価値にもとづく俳句の分析ができ、他の芸術分野との交流ができる評論文化が定着すれば、これからの俳句は飛躍的な発展を見るだろう。そんな日を一日も早く実現させる一助になりたいと、ぼくはぼくなりの活動を続けている。

● 作句と選句の違い

さて、俳句は誰でも始められるように、選句も誰でもできる。しかし俳句と選句の、ユツというか方法論が同じというわけではない。俳句は内なる思い、つまり感情で作るが、選句は後天的に得た知識で判断する傾向が強いからである。優れた実績のある俳句作家が、驚くほどつまらない選句をしている例は無数にある。選句の基本は、当然のことであるが作品を正しく理解することだ。何が書かれているのかがしつかりと分からなければ選びようがないと思うのだが、ここがあやふやなことが多い。作品の中にある単語やフレーズに飛びついただけと思われる選句が意外に多く散見されるのだ。

たとえば「戦争は絶対してはいけ

ない。戦争に負けたあの悔しさを忘れてはいけない。勝てる作戦がなく戦争をするのは、国民を不幸にするだけである」という文章を見ていただきたい。反戦か好戦かと言えば、これは好戦の心情だろう。全体を読めばそれが分かるが、最初の「戦争は絶対してはいけない」だけに幻惑されてついつい反戦の思いとして共感してしまう。十七音程度の短い俳句では、この文章のように明確でなく、ニュアンスとして描かれることが多いので、このニュアンスを読み取ることが難しい。

ここまで極端でなくても、作品の季語を解釈していない選評はたくさんある。当然選句者の意識の中に季語の心情は入っていないだろう。

「よく読む、正しく読む」ということは場数を増やすことでしか実現しないが、一語一語に注意して、「文意は自分で組み立てるのではなく、作中の文意をくみ取る」ことに徹する努力をすれば、上達はずつと早くなるはずである。

● 身近な句会の選句

この「正しく読む」を大前提として、選句の実際は多様な形を取る。一番身近なのは自分が属している

「句会」だろう。ここでは気心の知れた仲間が揃っている。作品を見ただけで、作者名が分かるかも知れない。このような句会では、率直に自分が好きな作品を選句することが大切である。作者が分かるので、ご褒美で一句などというの厳禁だ。こんな選をしたら選の信用を失うし、知らず知らずのうちに自分の選句眼も曇ってしまう。

また上手い句だとは思っても、自分が好きでなければ選はなくて良い。たとえば好きな小説家の作品でも、自分の嫌いなテーマの作品は買わないだろう。それと同じである。

● 雑詠句会の選句

次の段階が当協会の「第一回雑詠句会」「第二回雑詠句会」「自薦作品」という通信句会だろう。句会に属していない人はここが最初の選句ということになる。この句会は協会内の勉強会であるので、自分で属している句会と同じような選考基準で選句してかまわない。よく読んで好きな句を選べば良い。その場合「ま」とまっではいるが共感の薄い作品」と「表記は荒いが共感される作品」のどちらにするか迷うシーンがあるかも知れない。これはケースバイケー

スだ。選者が総合的に決めるしかないので、未練を捨てよう。

また、地元の句会で一度採った作品が、再び出句されている場合もあるだろう。一度選句した作品は二度と採らないという信念の人もいるが、あまり頑なにならない方がよいと思う。なぜなら自分にとって二度目の句でも、他の人には初出である。

たまたま自分の句会で採ったという偶然を、公の選句の場に持ち込まない方がよいからだ。とはいえ、二度目なら作品としての鮮度が落ちて感じられるのは否めない。他の候補の句と比べて、鮮度が落ちたことを勘定にいれても、それでも良いと思える作品は採る、鮮度が落ちた句では負ける場合には採らないという、この原則を守ればよいだろう。

● 各種俳句大会の選句

続いての選句のステージは、各種の大会だ。大分県現代俳句大会は協会が主催している大会であるが、この大会は内部の勉強会ではない。会員だけでなく一般の人も参加して秀句を競い合う、本来の意味での俳句大会である。大分県現代俳句協会では出句した会員全員が、自動的に選者になってもらっている。

● 有料の俳句大会の選は責任重大

このような大会は、通常は投句が有料であることが多い。有料であるということは、投句者は対価を支払って自分の作品についての公平な審査を求めているのである。選者にとつてこれは大きな責任である。そのことを意識して選句することが大切である。まず良く読むこと。そしてすべての句を公平な目で審査することが重要だ。大会ともなると、投句数は五百や千を超えることもある。一番目から順に選んでいくと、最初は力を入れて読んでいったものが、三十分もすると疲れてくる。全体で二十句選の場合、最初の一、二ページはたくさん選句しているのに、五ページを越えて来ると数ページに一、二句しか採っていないという選をよく目にする。

● 数日かけて選をする場合のコツ

ある場合は、一気に選句することができないので、数日に分けて選句するという場合もあるだろう。大きな大会では千句、二千句という量になるので、とても一日では選べない。そんな場合は何度かに分けて選句することを勧めたい。やり方は

こうだ。まず自分に与えられた選句数の三倍ほどの数を選ぶ。20句選の場合は60句選の選考基準を自身の中で作るわけだ。かなりの緩選でちょうどいい。その緩選で、たとえば五日かかって、六十句ほどの選句を完成させる。厳選したものではないので、出来映えには差があるだろう。それでいい。

● 最後の選は一気に行う

そして、次が肝心であるが、その緩選をした六十句の中から最後の二十句を選ぶのである。全体が六十句ならばそれほど時間をかけずに二十句を選べるはずである。つまり同じ感覚で、同じスピードで、同じ選考基準で選べるわけである。ぼくは必ずこうして選んでいるわけであるが、これ以上に公平に選句できる方法を知らない。

● 別の句会で一度見た作品の場合

それから、前で触れた二度目の俳句に出会った場合の考え方である。大会の選句の場合は、極力自分の好みを排し、可能な限り客観的に秀句だと思える句を選ぶべきだとぼくは思う。選に一票以上の責任が生じる場合は、好きなテーマの好きな言

い回しの作品を採ればいいが、大会ではそれが許されない。「好きな選」ではなく「よい選」「公平な選」を心がけるべきである。二度見たので、という理由でその句を落とせば、人からは「この選者はこの俳句の良さが分かっていない」と見なされる。大会の選をする場合、他流派の独特の言い回しや、流行の傾向が嫌いな場合もあるだろう。話し言葉やオノマトペが多い作品は読むに堪えないと思う選者もいる。

● 他流派の作品には寛容が大切

しかし選者はたとえば医者とおなじである。顔つきや態度が自分の好みではないといつて退ける医者は藪医者だと言われて患者は遠ざかるだろう。自分好みの選ばかりしては、そもそも結社や同人の垣根を越えた当協会に属している意味がなくなってしまう。寛容に認め合う精神が大切である。

● 選評は自分の理解を隠さない

以上、主に選句について書いてきたが選評についても一点だけ言っておきたい。それは可能な限り全体像を書くということである。協会内の勉強会の選評でも「そのつらい気持

ちは良く分かります。共感しました」とか「〇〇さんのお母さんを思う気持ちに涙ができました」というような短評がよくある。間違っているわけではないが、一番知りたいのはどの、どの表現がその感慨をもたらしたのか、選者はその表現をどう捉えたのかという、まさにその点が読者の知りたいところである。そこをばかせば、解釈が違つと恥をかく心配がない代わりに、単なる印象論になり勉強にはならない。字数制限にもよるが、できるだけ全体の意味や個別の表現をきちんと解釈した上で感想に入ってもらいたい。

● べきなのはNHKも一緒

EテレのNHK俳句でも「分かる、分かる、その気持ち！」などと選者とゲストが盛りあがっているシーンがよくある。選者なのに、正しい解釈には興味がないらしい。自分なりに作品の全体と細部を余さず解釈することが俳句の勉強の基本であると思うが、NHKでも、第四週の高野ムツオ氏の回以外は全滅である。悪い例を見習わず、ぼくたちの協会から正しい選評のあり方を発信していきたいものだ。(了)

第2回 やまなみ牧場俳句大賞



昨年の園田武子さんと安部社長

県協会が後援をしている「やまなみ牧場俳句大賞」の受賞式が11月23日の勤労感謝の日に、同牧場で開催されました。今年で第2回目になります。この行事の経緯については前号の会報をご参照ください。同牧場は6月開催の「第20回県協会吟行俳句大会」の会場としても無料でご提供いただきました。

九重の天気は変わりやすく、昨年は霧と霧雨の中で開催しましたが、今年には好天にめぐまれました。上の写真は、大賞に選ばれた豊國隆信さんの句碑を建てた後のものです。左手にあるのが昨年の大賞、園田武子さんの句碑です。園田さんはこのイベントに出句したあと、11月9日に急逝しました。牧場の好意で、園田さんには特別賞が贈られました。

【入賞作品】

《大賞》

行く雲や羊を追った夏帽子

豊國 隆信

《準大賞》

草萌える羊の目線エルサレム

林 香澄

昂ぶれる吾も夏野の一人なり

幸谷 恵子

《入賞1席》

群羊動けば動く秋日かな

赤峯 友子

《入賞2席》

秋色に溶け込むシーブドックシヨ

足立 町子

《入賞3席》

紫陽花の雨も嬉しい牧場かな

竹尾 友彦

《入賞4席》

イーゼルを置いて指拵秋の蝉

高倉 直人

《入賞5席》

馬の背に重ねてみるのは春の山

前間 優太

《特別賞》

息を吸う春です春の牧場です

園田 武子

アイスより馬が見たいよねえ早く
(小1) 丘太 蒼一

令和5年度県協会「役員会」



12月10日(日)、コンパルホールで令和5年度の役員会が開かれました。この役員会は会則11条にもとづき開会されたものです。

令和5年度の会員の動向、行事、イベント等についての協議の後、次回の「第34回定期総会」について意見を交わしました。参加者は有村王志会長、上田たかし副会長、河野則子副会長、足立攝幹事長、田代直之幹事、菅登貴子幹事、足立町子事務担当の7人でした。

有村王志会長が大分合同新聞俳句欄の選者に

大分合同新聞読者文芸の俳句欄の選者に、当協会の有村王志会長が就任し、これまでの選者である谷川彰啓顧問と引継ぎを行いました。有村会長はすでに11月から選を初めています。大分合同新聞1月3日付けの「第39回読者文芸コンクール」と「第60回大分合同新聞読者文芸年間賞」が谷川顧問の最後の登場になりました。協会では現代俳句を広めるため、有村会長と協力して、積極的に投句を呼びかけていきます。

九州現代俳句大会がコロナ後初の有人で開催

10月21日(土)、第14回九州現代俳句大会 in 熊本が紅蘭亭下通本店で開催されました。

大会に先立って開かれた理事会では、協会本部の一般社団法人化にともない、いくつかの変更点が協議され、決定は次回(令和7年)の大会に持ち越されました。

一致点は、従来の「現代俳句協会九州地区連絡会」を「九州現代俳句連合会」とする。隔年で開催しているこの大会を「九州地区現代俳句大会」から「九州現代俳句大会」とする。協会本部からの交付金が廃止されるので、各地区協会が年五千円の拠出金を納める。等々です。

熊本大会は高岡修氏が「詩と俳句」の演題で講演を行い、次回開催県として有村王志会長が挨拶しました。大分からの参加は有村王志、足立攝、足立町子、赤峯友子の四氏。



講演する高岡修氏

《入念》
海神 瑠珂(愛知県)

ボチ去年死んじまったよ春時雨

山田錡一(大分)

祖母登山脱いだ帽子に秋の風

《逝去謹悼》

園田 武子

(11月9日逝去・享年78歳)

《発展基金協力者》※一口千円
(前回報告できなかった分も掲載)

- ・赤峰佐代子……………二口
- ・有村 王志……………二口
- ・安藤 セツ……………二口
- ・井上 則子……………三口
- ・上田たかし……………三口
- ・大神 愛子……………六口
- ・小野みち子……………一口
- ・甲斐加代子……………三口
- ・鎌倉真由美……………三口
- ・倉迫 順子……………十口
- ・神 慶子……………三口
- ・幸谷 恵子……………三口
- ・河野 輝暉……………十口
- ・坂本 一光……………一口
- ・佐々木 玉……………三口
- ・佐藤 哲夫……………三口
- ・田代 直之……………三口
- ・田中 充……………三口

- ・谷本 親史……………三〇
- ・永松佐世美……………一〇
- ・早澤まり子……………一〇
- ・久枝 花城……………三〇
- ・平田千代子……………三〇
- ・本田 圭子……………二〇
- ・宮川三保子……………三〇
- ・森山 秀子……………三〇

- ・和田 明美……………三〇
 - ・白土 正江……………三〇
 - ・林 香澄……………三〇
 - ・溝部 文夫……………三〇
 - ・立花真由美……………三〇
 - ・天田 泉美……………三〇
- ※ご協力ありがとうございました。

句会探訪 ⑬

桂流句会

「非会員を含めて三人以上集まれば句会として承認する」という協会の方針を知って、九月三十日の県



現代俳句勉強会（コンパルホール）の席で足立幹事長に相談したのが全ての始まりでした。

「非会員を含めて三人以上集まれば句会として承認する」という協会の方針を知って、九月三十日の県現代俳句勉強会（コンパルホール）の席で足立幹事長に相談したのが全ての始まりでした。

い発足メンバー四人です。いかにして単なる事実の報告でなく、その背後にある複雑な人間心理が描写できるのかという点に苦慮しながら作句しています。

初心者にとつて毎月五句提出することは大変ですが、足立夫妻のなごやかな指導のもと、三回目の一月句会もあつという間に過ぎてしまいました。楽しくなれば続かないので、楽しい句会を心がけています。

いつか心の眼で見て、心の耳で聞こえる俳句が詠めることが目標です。

十一月八日、足立夫妻を招いて豊後高田市「玉津こいこい」で結成俳句会を開催しました。全くの初心者二人を含めて俳歴の浅

た詩情を表現できる俳句が詠めるようになることが目標です。

《受賞・表彰》

●国東市老人クラブ連盟、国東市共催功労感謝状。文芸誌に十五年以上俳句を投句。

福井トミ子、井上政人、大森浩司の三氏

●「宗艦祭にちなむ小・中・高校生俳句作品集」

《優秀賞》

夏の夜自然の音が響いてる

（高室小6年）合田英怜奈

●大分合同新聞第39回

読者文芸コンクール

《三席》

新米や棚田を守る村閑か

田代 直之

《三席》

やわらかな「書」の遺作展和む秋

安森 範明

●第14回九州現代俳句大会in熊本

《上地安智・特選》

子を生みに帰らぬ日本麦の秋

河野 輝暉

《高岡修、森さかえ・W特選》

もぎたてのトマト生真面目すぎるのよ

鎌倉真由美

《山口木浦木・特選》

卒寿まで来て露草に諭される

児玉 利子

《片山亀夫・特選》

晩夏光合鍵を置く別れの日

白土 正江

《園田千秋・特選》

黙禱のサイレン鳴りやまぬ

伊藤 利恵

《山下久代・特選》

初雪や紅買いに行く明日ありて

河野 輝暉

令和六年一月二日発行

会報第百二十号

発行人・有村 王志

発行所・大分県現代俳句協会

編集人・足立 攝



大分県現代俳句協会

OITA-KEN GENDAI HAIKU ASSOCIATION

会長 有村 王志

《事務局》

〒879-7151 大分県豊後大野市三重町西泉436

足立 攝 方

TEL.&FAX. 0974-22-3749 郵便振替 01900-5-57481

URL:http://gendaihaiku.net

E-Mail: info@gendaihaiku.net

